

性格診断テストによる心理的影響

：インタビュー調査からの分析

C03048 菅野真生

～研究史～

坂本ら（1995）は、通俗的心理テストの結果のフィードバックが、学術的心理テストのそれと同じ程度に、人々の行動に影響し、自己成就現象を引き起こしうることを示唆している（p87）。またここでいう通俗的心理テストとは、科学的な手続きを通して作成されておらずテストとしての妥当性に疑いがあるものを指す。

近年においても、日本MBTI協会がMBTI（Myers-Briggs Type Indicator）を真似た16Personalities性格診断テストを受けた人に対して、“性格を「遊ぶ」だけで人はいろんなインパクトを与えたり、受けたりしている。本来のMBTIのタイプはそんな理論がベースになっていないにも関わらず、まるで自分のタイプが永遠に変わらないかのように捉えてしまうと、自分で自分をその型に当てはめてしまい生きづらくさせたり、成長を止めてしまう危険がある。”、ないしは“他人に対してタイプと行動を全て結びつけるような捉え方をすると、知らず知らずのうちに相手を誤解することに拍車がかかったり、何でもタイプに当てはめてしまうことで相手を傷つけていることも起こりうる。”と警鐘を鳴らしている。

～目的～

今回の研究では、性格診断テストを受けたことがある人にインタビュー調査を行いどのような影響がでているのか分析することでインターネット上に乱立する性格診断テストのメリット・デメリットを調べる。

～方法～

1. 研究参加者

淑徳大学の学生にインタビューを行って調査した。

2. インタビューについて

インタビューは、質問の内容をあらかじめある程度決めてから行う「半構造化」の形で行った。

3. インタビュー調査の実施

研究参加者との日程調整後、インタビュー調査を11月～12月にかけて大学の教室を借りて対面で行った。得られたデータをもとに、GTA分析を行い、カテゴリー関連図を作成した。

4. GTA分析

インタビュー参加者4名から得られたデータを逐語録に起こし、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下GTAと呼ぶ）を行った。GTAは、データを基にして分析を進め、単なるデータの要約にとどまらず、データの中に出てきた現象がどのようなメカニズムで生じているのかを示す『理論』を産出しようとする研究方法である（戈木，2014）。

～結果～

参加者からの回答をもとに、データ・ラベルに分けたインタビューデータを作成した。またラベルをまとめてカテゴリーを生成した。

表1. 参加者Aのラベルとカテゴリー一覧

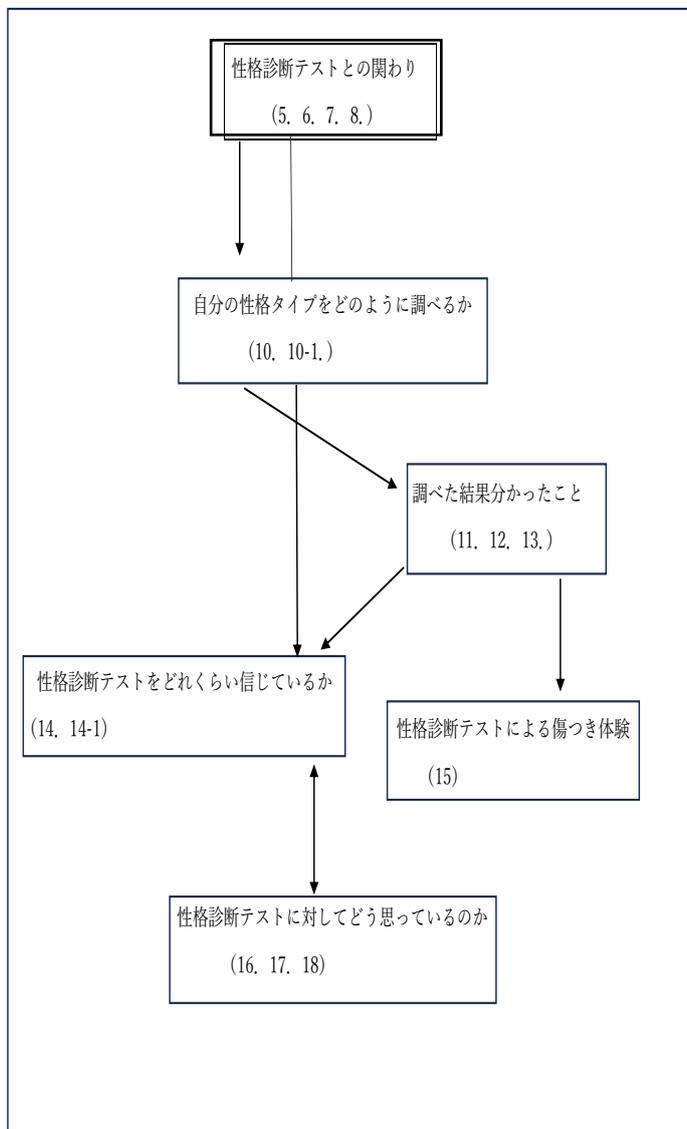
カテゴリー	ラベル
・性格診断テストとの関わり	5. 性格診断テストを初めて受けた時期 6. 今まで何回受けたか 7. どこで受けたか 8. 何故受けようと思ったのか
・自分の性格のタイプをどのように調べるか	10. 診断テストの結果を受けて調べたりしたか 10-1. インターネットで自分のタイプを調べた
・調べた結果、分かったこと	11. 自分の長所や特性を知れる反面、苦手なことも知ってしまい、挑戦できない

	12. 自分の結果に納得した結果、挑戦する前に苦手なことを避けてしまう 12. 巨匠型の苦手なところ 13. 巨匠型の得意なところ
・性格診断テストをどれくらい信じているか	14.性格診断テストに関しては半信半疑 14-1. 当たっているところもあれば当たっていないところもある
・性格診断テストによる傷つき体験	15. 性格診断テストの結果を受けてインターネットの記事によって傷ついてしまった
・性格診断テストに対してどう思っているのか	16.あくまでも指標の一つならいいが、完全に態度を変えるのは違う 17. 自分の得意なことと不得意なことを客観的に見られるのはいい 18.自分の短所を自覚して諦めるのではなく、挑戦するのが大事

2. 参加者 A のカテゴリ関連図

参加者 A のインタビューカテゴリから作成したカテゴリそれぞれの関連を矢印で表したカテゴリ関連図を作成した。→がそのカテゴリに対して起こる作用、⇄は相互作用、囲みの中にはカテゴリ名と該当するラベルを示した。

図1. 参加者 A のカテゴリ関連図



～考察、今後の課題～

インタビュー調査を行ってみて、やはり自分を型に当てはめてその性格をインターネットなどで検索することで、自分の長所を知り伸ばせる反面、苦手なことも知ってしまい、それらから避けることで挑戦する機会を失っているのだということが分かった。これらの結果からやはり性格診断テストはむやみに信じるのではなく向き合い方を考える必要がある。また人数が集まらなかったため今回は性格診断テストのネガティブな部分が大きく出ていたが、人数をもっと増やすことで、性格診断テストの様々な向き合い方が発見できると考える。

～参考文献～

戈木クレイグヒル滋子 (2014). グラウンデッド・セオリー・アプローチ概論 KEIO SFC JOURNAL Vol. 14, No1, 30-43

坂本章・三浦志野・坂本桂・森津太子 (1995). 通俗的心理テストの結果のフィードバックによる自己成就現象—女子大学生に対する実験と調査— The Japanese Journal of Experimental Social Psychology Vol. 35, No1, 87-101

一般社団法人日本MBTI協会「【緊急情報】16Personalities 性格診断テストを「MBTI®」だと思って受けられた方へ」

<https://www.mbti.or.jp/attention/> (閲覧日 2023年7月21日)